

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒 207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
<https://tohoku-saiko.jp/>
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create , TOHOKU!

2 0 2 5 年（令和 7 年）5 月 16 日 金 曜 日

無料

第156号

毎月発行

発行 2025 年（令和 7 年）5 月 16 日 金曜日

【当新聞発行責任者
兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、71 歳の新人
歴史映像作家兼プロデュー
サー。3 作目の「古代製鉄の
埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】
の大崎上映会は延期。とは
いえ新型コロナ禍を乗り越
えて 4 作目制作に向けて奮
闘中。趣味は古代史・縄文
文化研究。埋もれた歴史を
発掘することと東北から日
本を変えることを標榜。



次々に押し寄せる東北水産業のたくさんの課 題を一挙に跳ね返す策はあるだろうか？

海も温暖化で大変化、いままで獲れていた魚は獲
れない、漁業従事者はどんどん高齢化、後継者も
いない、収入も低い、設備投資も出来ない、そして
「夢」もないの「ナイナイ尽くし」の状況下から大逆
転できる打開策はないのか？

そうだ！東北に【さかな専門学校】を誘致せよ！

東北水産業に次々に押
し寄せる多くの問題

当新聞では、これまでに
何度も東北水産業の諸課題
を取り上げてきた。前号で
も二面を使って東北水産業
の課題を論じたばかりだ。
また、それらの課題に対
し、当新聞が考えうる限り
の解決策も提言してきたつ
もりである。

しかし、この十数年を見
ても、事態が良い方向に向
かったという話は一度も聞
いたことがない。それどこ
るか、どんなのつぴきな
らない方向に追いつめられ
ていると感じる。

このままいけば、なすす
べなく、押し寄せる諸課題
の嵐の前に呆然と立ちすく
んで、縄文時代以来続く東
北水産業の消滅を待つほか
はないのだろうか？

それとも、この圧倒的な
アゲインストの風を少しでも
押し返す方法はまだある
のだろうか？

立ち向かえることと
立ち向かえないこと
を分離して考える！

いま東北の漁業関係者の
目の前にあるのは、一面下
の図のような、長い間未解
決状態のまま放置してきた
せいで諸問題が複雑に絡ま
り合っただけで、それだけ
でもない「諸問題の巨大な
かたまり」だ。

東北水産業は、それを突
きつけられて、どこから手
をつければいいのか迷って
暮らしている状態だろう。

往々にして、こうした状
況下では、解決しようとい
う気力さえ最初から萎えて
しまうものである。戦う前
にギブアップである。ため
息をつくばかりで、解決に
向かうことがないのだ。

そうした気持ちから分かん
ないわけではない。外部か
らいろいろ叱咤されても、
余計に気が滅入るだけとい
うことも分かる。

とはいえ、何もしなければ、
東北水産業は消滅を待
つしかない。

ではどうすればいいか？
まだわずかでも気力を掘
り起こせるならば、東北水
産業にとつてのこの「巨大
な諸問題のかたまり」を大
胆に二つに分離しようでは
ないか。

「切る」
大自然の変化と東北
単独で出来ない事は
「切る」

人類は誕生以来、大自然
と真正面から戦ったことは
ないし、ましてや戦って勝
ったことなどない。

大自然は圧倒的すぎて、
とても太刀打ちできない。

ひ弱な人類は、大自然の
変化を先読みし、その変化
に対応して生き延びること
を選択してきた。だから、
今回もそうすべきである。

すなわち、地球温暖化に
よる東北を取り巻く海の
変化に真正面から戦いを挑
んではならない。第一、勝
てる訳がないのだ。

たとえば、海水温が一度
上昇したので、それを人間
の手で一度下げることなど
出来るはずがない！

従来の魚種ではない南の
魚が獲れて、従来の魚が不
漁だと嘆いても、戻ってこ
るわけがない。

魚にとつて、海水温が一
度上昇するということは死
活問題であり、上昇すれば、
より寒い北の海に移動する
のは当然である。一度高い
海水では生きられないのだ。
したがって、まず、諸課題

のうち、この大自然の運行
に係る諸課題すべて

を「切る」ことにしよう。
どうかしようと考える
のを止めて、単に変化に対
応していくことだけを考
えるのだ。
そして嘆かないことだ。
ため息をつかないことだ。
ムダだからである。
さらに、東北単独で出来
ないことも基本的にあきら
めよう。

と前に解決していたはずだ。
東北単独で出来る事
にしぼる
一面下の図で、「自然に起
因する問題で人間には制御
不能の問題」と「東北内だけ
では解決できない問題」を
除外してみると、何も行動
しないのに、突然、諸問題が
一挙に半分には減る。
それだけで、なんだか
気が楽になるではないか？
そして半分になった課題
解決のみに集中すればよい。

神奈川県にある『日
本さかな専門学校』
そんなことをつらつら考
えていたある日、何気なく
TVをつけていたら、十代の
男女入り混じる学生らしき
集団が、巨大な水槽の中を
泳ぐさまざまな魚にワイワ
イ騒ぎながらエサやりをし
ている場面に遭遇した。
それはどうも、どこかの
学校の授業風景らしく、異
なる魚は異なる仕方エサ
をゲットするのを学ぶとい

東北水産業の問題リスト

区分	課題
自然に起因する問題で人間には制御不能の問題	① 温暖化による獲れる魚種の変化 ② 沿岸部の「磯焼け」による海藻や貝類の消滅 ③ 海流の変動による不漁
東北内だけでは解決できない問題	① 外国船団による乱獲の影響 ② 東北の人口減少による影響 ③ 外国の東北水産品の不買運動
東北で解決可能だが解決しようとならない問題	① 漁業従事者の高齢化 ② 漁業事業後継者育成 ③ 養殖漁業への転換 ④ 水産設備投資の強化 ⑤ 東北水産品のPR ⑥ 東北水産業の6次化

うものだった。

動きが活発な魚は水面に浮いてきて我先にエサを奪うし、動きの緩慢な魚には、水槽の下にまでエサを運んでやる必要があることを体験する授業であった。

そうすることで様々な魚の特徴を実体験で学ぶという、水族館に勤務することを想定した授業であり、見ているこちらにも新鮮だった。そして、そこは、神奈川県三崎半島にある『日本さかな専門学校』であることも分かった。そうした専門学校があることをそのTV番組で初めて知った。

なぜ『日本さかな専門学校』を作ったか？

「水産」を教えるならば、日本各地にはすでに水産高

校と水産大学がある。

そこに、さかなの専門学校を新たに設立する意味は何だろうか？

水産高校との違いは、この専門学校は水産高校のように水産以外の一般教養カリキュラムがないことで、魚尽くしということのよう

だ。この専門学校のホームページを見ると、当新聞と同じような水産業の危機意識、すなわち、将来海から食用魚がいなくなるこ

と、温暖化や海洋汚染の影響により水産業を取り巻く環境は深刻さを増していること、日本では漁師の高齢化や後継者不足など、漁業の担い手に関する多くの問題も山積

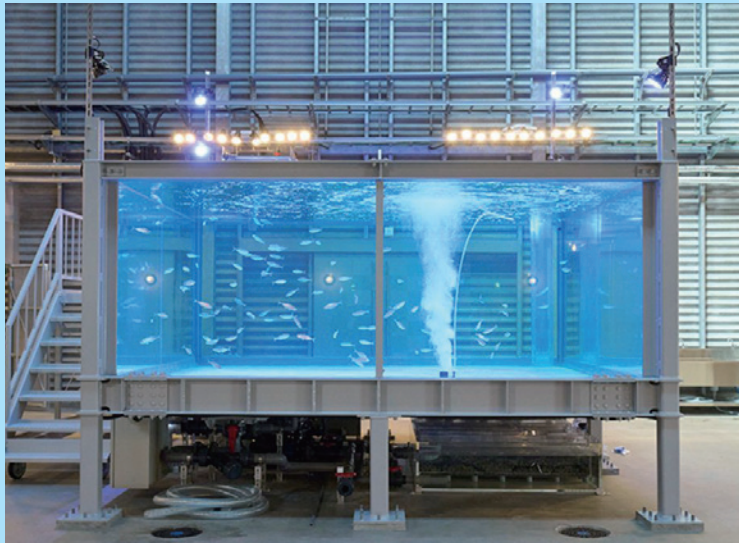
しているというのが設立動機の背景のようだ。

ユニークな学科もある

今後大きく拡大すること



神奈川県三崎市にある『日本さかな専門学校』の校舎・・・『日本さかな専門学校』WEB より



校舎 1 階には巨大な水槽を設置・・・『日本さかな専門学校』WEB より」



三浦海岸での地引網体験・・・『日本さかな専門学校』WEB より」

が予想される魚需要以外の分野でも、関連する需要は拡大しているということで、人口比で世界トップクラスの日本の水族館、新しいアイデアを取り入れた水族館の職員養成もするようだ。

密を避ける娯楽としての釣り人口増加に対応するか、自宅での魚鑑賞趣味に対応するとか、非常に発想がユニークである。

四分野に分け総合学習

また、業種別に四分野に分け、総合的に学ぶことがこの学校の特長のようにだ。以下はホームページからの抜粋である。

1. さかなを獲る、育てる
海洋資源が激減する中、育てる漁業」としてその重要性が増している「養殖」学を中心に、漁業全般について

学習します。さまざまな食用魚の飼育はもちろん、飼料開発から始めるブランド魚の育成にもチャレンジ。

GPS や水中ドローンを使った最先端漁法についても学び、地元企業の協力のもと、実際の漁も体験します。

2. 食としてのさかなを学ぶ

獲れたさかなをさらに価値あるものにするのは「調理技術」。ここでは、魚種に合わせたさまざまな調理法を

学び、天然魚と養殖魚の味の違い、飼料や育て方による養殖魚の味の違いを体感します。また、市場の仕組み、食卓に届くまでの流通、缶詰や練り物といった水産加工品など、食品ビジネス全般についても幅広く学習します。

3. さかなの魅力を体感、発信する

堤防、河川、湖沼、さまざまなロケーションでの「釣り」を体験し、多彩な魚種や釣り具への理解を深めます。また、観賞魚の飼育や水槽レイアウト、水族館についても学習。「さかなという存在はなぜ、私たちの心を豊かにしてくれるのか」「これからの時代に、その魅力をさらにより良いカタチで発信するにはどうするべきか」について考察します。

東北に「分校」誘致！

ここまで十二分に水産関係カリキュラムが揃っているならば、わざわざ東北オリジナルでゼロから学校を作る必要もないと思われる。神奈川県三崎半島の学校の【分校】を、カリキュラムもそっくりそのまま、東北各地に誘致すればよいのではないかと強く思う。

4. ヒトとさかなの共生を目指す

さかなの生態系や環境について、実地での研修を交えながら学習します。海に行き、森に行き、磯や川辺の水生生物を定期観測すると、今、生息環境に何が起こっているのかが見えてきます。

豊かな生態系環境とはすなわち、ヒトにとつても豊かなということ。さかなと私たちが持続的に共生するために何が必要かを考えます。

ここに「分校」を設置するからだ。ひとつというわけにはいかないのであれば東北各県に一所ずつがいいか？

当然、各県からの学校運営サポートも必要だろう。この学校が東北各地にできることによる地域活性化には大いに期待できる。

東北水産業が抱える課題を解決してくれる？

こうした「分校」が設置され、東北内だけでなく、全国からも生徒が集まり、順次

卒業生を送り出せるようになり、彼らが東北に定着するようにになれば、別表に記載したようにほとんどの課題が徐々に解決していく未来図が見えてくる。そうな

ったら最高である。なお、この学校卒業後の進路は、漁師、養殖業者、水産食品・加工メーカー勤務者、鮮魚店勤務者、水族館飼育員、釣り具メーカー員、海洋環境保全団体職員、遊漁施設スタッフなど多種多様

で、いまの東北の漁業人材不足にピッタリで、言うことなしである。ただ、ひとつ気になる点といえば、全国から生徒を集めるとなると、寮費等余計な出費が予想される。そこでインターンのアルバイト受け入れ態勢を整備し、授業の合間に働いてもらい、寮費等の足しにしてもらい、併せて東北水産業の人材不足も解決するという一石二鳥狙いもできるかもしれない。

「さかな専門学校」を誘致すると諸問題が溶けていく？

課題	「さかな専門学校」を誘致したらどう変わる？
① 漁業従事者の高齢化	「さかな専門学校」の卒業生が新たな漁業の担い手となり、どんどん入れ替わり、漁業従事者の平均年齢が下がっていく
② 漁業事業後継者育成	「さかな専門学校」で新たな後継者が「育成」される
③ 養殖漁業への転換	「さかな専門学校」のカリキュラムのなかにある養殖漁業に関する授業で養殖業への新たな眼が開かれていく
④ 水産設備投資強化	「さかな専門学校」で最新の設備を学び、実際の漁業に活かす
⑤ 東北水産品のPR	「さかな専門学校」の幅広いカリキュラムのなかで水産品のPRも学んで活かすことができる
⑥ 東北水産業の6次化	「さかな専門学校」の卒業生は、漁業従事者になるだけではなく、水産物関係の飲食業界に進む者も出てくるので、卒業生同士の連携で、自然に東北水産業の6次化が進んでいく
副産物 その①	東北各地に「分校」を作ると、全国から若い男女が集まる
副産物 その②	在校生をアルバイトで採用して「人手不足」を一部解決する

海のパイナップル…昨年のホヤの不漁が気がかりだ！

外国の不買運動が終わったら、今度は温暖化で大不漁、不幸続きのホヤ



今月はじめ、都内で食べたばかりのホヤの刺身

昨年のホヤの不漁は壊滅的、今年は大丈夫？

筆者は、三陸の海の珍味、あるいは「海のパイナップル」と称される「ホヤ」が大好物である。

「ホヤの酢の物」をどんぶり一杯に山盛りにして、その一品だけで日本酒がたらふくいただけるほどの「ホヤ好き」である。

しかし、東京圏ではその「ホヤ」が嫌いだという人も依然として多い。

ホヤ嫌いの多くは、かつて、ホヤ流通網が未整備で、そのために鮮度の落ちたホヤを食べてホヤ嫌いになったケースがほとんどである。

こうした実情を見かねて、筆者は、当新聞でも何度かホヤPRを行った。

また、大分前になるが、普

段は料理などしない筆者であるが、自宅でホヤ料理にチャレンジし、ホヤ料理の一連のラインアップを作ってみたこともある。

それに飽き足らず、都内の居酒屋の一角を貸し切り、新鮮なホヤを三陸現地から調達して、「ホヤ刺し」はもちろん、「ホヤめし」や「ホヤの酢の物」など、ホヤ料理のラインアップを提供する飲み会まで開催して、「打倒ホヤ嫌い」を試みたこともある。

その「ホヤ」に、昨年、大ピンチが襲ったのだ。

三陸の海の温暖化で、壊滅状態ともいえる大不漁が襲ったのだ。

原因は三陸海の温暖化

当新聞の一面と二面で、

大自然の運行の変化による水産業への悪影響を嘆くと言ったばかりなのに、「嘆き節」でこの記事を書いていることは自覚している。書かずにおれないのだ。

三陸沖の海の温暖化で、「ホヤ」が昨年は大不漁だったが、その直接的な原因が、コケ状の不明な生物が、養殖ホヤにこびりつき、大量に死滅していたというのである。

こうした現状は、人間の手では何ともしがたいのは重々理解しているが、ホヤ好きの筆者としては嘆かずにはいられない。

養殖ホヤは食べられるまでに三年かかる

養殖ホヤは収穫できるま



コケのような生物が付着
昨年は養殖ホヤにコケ状のものがついていて

がとても気になる。

東日本大震災も外国のホヤ不買運動も乗り越えたホヤ

ホヤ養殖は、東日本大震災を乗り越えた。

次にやって来たのが、数年前の外国によるホヤの不買運動だった。

特に宮城県産のホヤの七割を消費していた韓国が、福島第一原発による風評被害による「不買運動」で、輸入をパタリと止めたこともあった。

そのときも当新聞は何度も国内消費を呼びかけた。そこに再びの「障害」が舞い降りてきたのだ。

かわいそうなホヤ。何としても今の窮地から救い出してやりたい。

そうしたこともあって、今月初めに、都内の料理店で「ホヤ刺し」をいただいた。無くしてはならない食物である。

宮城県の木の屋石巻水産の元社長・木村長努氏、叙勲される

東日本大震災を生き残り、直後に「奇跡の缶詰」で被災地を勇気づけ、さらに「金華サバ缶詰」でサバブームを引き起こした！



旭日章 木村長努氏「木の屋石巻水産」元社長

木村 長門さん(72)

叙勲された木の屋石巻水産元社長の木村長努氏・・・TBS NEWS DIG より

先月末に発表された春の叙勲で石巻市の木の屋石巻水産の元社長の木村長努氏旭日章を受章した。

当新聞でも何度か取り上げ、筆者とも親交もある氏の叙勲はまことに喜ばしい。木村氏は、震災を乗り越えて水産加工品の製造・販売に尽力した。

震災で売り物にならなくなった缶詰を、被災住民に緊急食糧として配った「奇跡の缶詰」の話は有名だ。

さらに、木の屋石巻水産の高級缶詰「金華サバ缶」は「サバ缶ブーム」に火をつけたことでも知られる。TVインタビューで氏は次のように述べている。

木の屋石巻水産 木村長努元社長・・・「私がいたのだというよりも、会社が評価されてこうなったことはうれしいですね」

木の屋石巻水産は、石巻港で水揚げされたクジラやサバなど水産物の加工品を

製造・販売している。

木村氏は、一九五七年に父親が始めた水産加工会社で働き始め、四十二歳で二代目の社長となった。

二〇一一年三月の東日本大震災では、本社工場や事務所が津波被害を受けた。

木の屋石巻水産 木村長努元社長・・・「水は2階まで来た。これではもう再開はできないという思いだった」

被災直後は、廃業も考えたというが、会社の灯火を消すわけにはいかないと工場を震災前と同じ場所に再建。内陸部の美里町にも工場を建設し、二〇一三年に生産を再開させた。これからも、ふるさとのために力を注ぎたいと話す。

木の屋石巻水産 木村長努元社長・・・「石巻は水産の街なので、どんどん水揚げが減ってきているなか、将来に向けて魚が取れるような海をつくっていく努力をしていかなければならない」との言葉も聞かれた。

大伴旅人・家持父子と東北

大伴旅人と酒

昔、小学六年生になって学校で日本の歴史を学ぶようになった時、担任の先生からそれぞれ好きな歴史上の人物について調べて、わら半紙一枚の「かわら版」にまとめ

るように、という課題が出されたことがあった。当時、源義経が好きだった私は、その忠実な家臣である武蔵坊弁慶についてまとめたのだが、級友の片倉君が大伴旅人についてまとめていた。その時私が全然聞いたことのなかった人物であり、「大伴家持なら知ってるけど、『おおとものたびびと』って誰？」って思った記憶がある。正しい読みは「おおとものたびと」。表記が違うので私の

ご先祖様ではないと思うが、万葉集の編纂者と名指しされている大伴家持のお父さんである。時は変わって、高校の時の国語の授業で、和歌をどれか選んでそれについて調べる課題が出されたことがあっ

た。その時になぜそれを選んだのかすっかり忘れてしまったのだが、私は大伴旅人の歌を選んだ。

験（しるし）なきものを念（おも）はずは 一坏（つぎ）の 濁れる酒を 飲むべくもあるらし

という歌である。「思ってもしょうがないことなど思い悩まずに、一杯の濁り酒を飲むのがよいようだ」という意味の歌である。

調べた当時はこの歌が、大伴旅人が大宰府に赴任していた時に詠んだ歌であるということから、旅人が藤原氏との権力争いに敗れて大宰府に左遷され、ため息をつきながら酒を飲んでいる情景を思い描いて、そのような状況で詠んだ歌であり、旅人の無念さが伝わってくる歌である、と皆の前で発表した記憶がある。

先日、何かの拍子にふとこの歌のことを思い出したのだが、当時の自分の解釈を

執筆者紹介

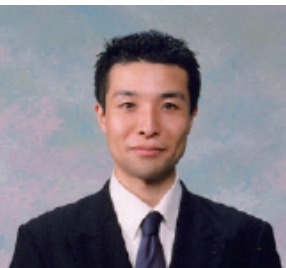
大友浩平

（おおともこうへい）

奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。

「東北ブログ」

<http://blog.livedoor.jp/anagma/>



Facebook
<https://www.facebook.com/kouhei.ootomo>

振り返ってみて、ひょっとしてその解釈は違っていたのではないかと思った。

この歌は、「酒を讀（ほ）むる歌十三首」の最初の歌である。酒を誉めるのに、一首どころか二三首もの歌を、旅人は詠んでいるのである。旅人はいつたいどれだけ酒が好きだったのかと思わずにはいられない。高校の頃はもちろん、酒など飲んだこともなかったので、当然ながら酒の良さなど分かるはずもなかったが、その後大人になって、特に私の場合はビールだが、酒に親しむようになってから、旅人が酒を誉めたこれらの歌の中には共感できる内容のものも多いと思った。たくさん

の歌から、旅人が酒をこよなく愛し、酒を飲んで楽しくわいわいやっている様子が浮かんでくる。

その文脈で捉えようと、この最初の歌は、もつと陽気な、もつと前向きな歌のように思えてくる。「つまらないことでよくよすんなよ、とりあえず飲もうぜ」というノリの歌だったのではないかと思うのである。同じ「酒を讀むる歌十三首」の中には、次の歌もある。

生ける者 遂にも死ぬるものにあれば この世なる間は 楽しくをあらなる間ば 楽しくをあらなる間ば

「生ある者は遂には死ぬものであるから、この世にいる間は楽しくありたいものだ」という意味の歌である。

その楽しくありたいと願う旅人のそばには酒があったわけである。

大伴旅人もその息子の家持も、歌人としてのイメージが強いが、大伴氏は実は元々古来朝廷における武門の家柄である。旅人は養老四年（七二〇年）に起きた九州の隼人の反乱の際には征隼人持節大將軍に任命されて反乱の鎮圧に功を挙げて

いる。

先の「酒を讀むる歌十三首」を詠んだのは、六〇歳を過ぎてから大宰府の長官である大宰帥（ださいのそち）に任命されて赴任した時であるが、それも高校の頃の私が取った大伴旅人左遷説の他に、そうした旅人の武威を背景にした統治の手腕が期待されているものという説もある。

「令和」の元号のきつけに

旅人と東北との関わりとしては、「続日本紀」の和銅三年（七二〇年）正月一日条が挙げられる。そこには、「朝賀に蝦夷等参列。將軍、蝦夷等を率いて行進」とあるが、この時の將軍が左將軍という地位にあった旅人である。同じく正月十六日条には、「蝦夷等に宴の後、授位・賜祿」ともあり、この時旅人に率いられた蝦夷は朝廷に帰属した蝦夷であったらしく、朝廷に宴を開いてもらい、位を授かり、祿を賜ったことが記されているのである。ただ、旅人自身は実

際には東北に足を運んだことはなかったものと思われる。

そう言えば、この大伴旅人が注目される出来事があった。今の元号は「令和」であるが、この文字を取ったのが、万葉集の中にある、旅人が大宰府に赴任していた際に自宅で催した「梅花の宴」の部分だったのである。万葉集には、この宴の席で詠まれた三三首の歌が収められているが、その序文の「初春の令月、気淑（うるわ）しく風和らぐ」という一節から「令和」の文字が採られたのである。

大伴家持と東北

旅人の跡を継いだ大伴家持は、より東北との関わりが深い。まず、家持は、万葉集にも収められている以下の歌で知られる。

天皇（すめろぎ）の 御代（みよ） 栄えむと 東（あずま）なる 陸奥（みちのく）山に 金（くがね）花咲く

「天皇の御代が栄えるようにと、東国の陸奥の山に黄金の花が咲いたという意味である。よく知られるように聖武天皇の時代、仏教の力で国家を鎮護する「鎮護国家」の思想に基づいて大仏建立の詔が発された。しかし、当時の国内にはこの大仏を鍍金する金が産出しておらず、その金をどのように調達するかが最大の課題となっていた。そうしたこ

ろ、天平二年（七四九年）に、陸奥守の百済王敬福（くく）からの、陸奥国小田郡（現在の宮城県涌谷町）で金が産出したことが報告され、黄金九〇〇両（およそ二キロ）が献上されたのである。

このことを喜んだ聖武天皇は元号を天平感宝（てんびようかんぼう）と改め、詔を発した。当時、家持は越中守として現在の富山県に赴任していたが、その詔に応じて東北で金が産出したことを寿いで、この歌を詠んだとされる。

延暦三年（七八四年）に、家持は持節征東將軍という役職に任ぜられる。これは、蝦夷征討を天皇に代わって行う最高責任者の地位である。翌延暦四年（七八五年）四月には、名取以南十四郡のことや多賀・階上二郡のことについて天皇に奏上している

ので、この時家持は征東將軍として実際に多賀城に赴任していたものと考えられるが、同じ年の八月に死去した。六四歳であったとされる。

死去した時の役職としては、持節征東將軍に加え、陸奥按察使（あぜち）と鎮守府將軍も兼任していた。陸奥按察使は陸奥と出羽、すなわち現在の東北地方全域の行政を管轄する役職であり、鎮守府將軍は陸奥の対蝦夷の軍政府の長官である。死去した時の家持は、当時の東北の軍政民政両面の総指揮官的な立場にあったわけ

である。ただ、家持赴任時に陸奥と出羽で戦乱の記録はなく、恐らくは家持は蝦夷と敵対せず、穏当に陸奥出羽両国を統治していたものと思われる。

万葉集最後の歌

万葉集には四五〇〇を超える歌が収められている。そのうち、実に四七三首が家持の作による長歌・短歌などである。ちなみに、旅人の歌は、先に紹介した「酒を讀むる歌十三首」を含む七八首が収められている。

その万葉集の最後を締め括る歌は、やはり家持の歌である。

新しき 年の始の 初春の 今日降る雪の いや重（しげ）吉事（よごと）

「新しい年の初めの初春の今日降る雪のように、次々と重なれ、良き事よ」という意味である。この歌は、家持自身にとつても最後に詠んだと言われている歌であるが、膨大な数の歌を収めた万葉集の最後を飾るのにも相応しい歌であるように思える。

家持が人生の最期を過ぎたであろう多賀城は、二〇二四年に創建二三〇〇年という節目の年を迎えた。記念式典を始め、様々な関連行事が開催され、多賀城市を中心に宮城県内は大いに盛り上がったが、その記念グッズの一つとして、オリジナルのクラフトビールも地

元醸造所によって造られた。その名がまさに、「いやしけよごと」であった。

多賀城跡の発掘調査では、当時米袋に付けていたと思われる「黒春米（くくしょうまい）」と書かれた木簡が出土しており、多賀城周辺ではその当時から米の作付けが行われていたことが判明している。

多賀城では、それを受けて現在も稲の原種に近い古代米が栽培されており、市の特産品にも認定されている。現在の米と違って紫色をした、当時の人に食べられていたであろうこの古代米が、「いやしけよごと」の副原料として使われた。また、当時は貢物や薬として使われて貴重品だった蜂蜜も、多賀城産のものがやはり副原料に使われた。

「いやしけよごと」の「よごと」は、実は掛詞となっていて、「吉事」と「夜毎」を掛けている。夜毎に味わい、吉事を祈念するということで、このビールの「いやしけよごと」というネーミングはとても良いと思った。栓を抜いて注ぐと、古代米由来の綺麗な琥珀色であり、蜂蜜由来のフローラルな香りもあり、穏やかなコクのある味わいのビールであった。創建一三〇〇年の年が明けたので、今は入手できないが、いつか復刻させてほしいものである。酒好きだった大伴旅人が飲んだら、どんな歌を詠んだらうか。

時を越えてつながる多賀城と大宰府

日本三大史跡と呼ばれる三つは、多賀城跡、奈良の平城宮跡、福岡の大宰府跡であるとされる。大伴旅人と家持が活躍した奈良時代、多賀城と大宰府は、共に朝廷から遠方に位置する出先機関（遠の朝廷（とおのみかど））として置かれた経緯があり、それぞれの地域を治める行政府であり、外交・防衛の拠点でもあったという共通点がある。ちなみに、大宰府の創建は大宝元年（七〇一年）で、多賀城創建の神龜元年（七二四年）より二三年ほど早く、大宝律令が制定された年に創建されている。

多賀城跡も大宰府跡も、どちらも国の特別史跡であり、また多賀城市は仙台都市圏、太宰府市は福岡広域都市圏と、それぞれ大都市圏に属し、人口規模や都市機能も似ているという共通点もある。

そして、これまで見てきたように、大宰府には大伴旅人が赴任し、多賀城にはその息子の大伴家持が赴任したという縁もある。それも決め手となって両市は友好都市協定を締結して、以来様々な交流を行っているそうである。東北からは大宰府はあまりに遠いが、旅人が好きな酒を飲みながら歌を詠んだかの地がどのようなところなのか、同じ酒好きとして一度訪ねてみたいものである。



アカゲラのドラミングですが



イワテヤマナシ



スズメノヤリ



フデリンドウ



アミガサタケ



シラネアオイ

季節である。

生命力を爆発させる、エネ

ルギーに満ち溢れる躍動の

季節である。

生命力を爆発させる、エネ

ルギーに満ち溢れる躍動の

季節である。

生命力を爆発させる、エネ

ルギーに満ち溢れる躍動の

季節である。

生命力を爆発させる、エネ

ルギーに満ち溢れる躍動の

季節である。

生命力を爆発させる、エネ

ルギーに満ち溢れる躍動の

季節である。

生命力を爆発させる、エネ

ルギーに満ち溢れる躍動の

季節である。

生命力を爆発させる、エネ

ルギーに満ち溢れる躍動の

季節である。

生命力を爆発させる、エネ

ルギーに満ち溢れる躍動の

季節である。

生命力を爆発させる、エネ

ルギーに満ち溢れる躍動の

季節である。

生命力を爆発させる、エネ

ルギーに満ち溢れる躍動の

季節である。

生命力を爆発させる、エネ

ルギーに満ち溢れる躍動の

季節である。

生命力を爆発させる、エネ

ルギーに満ち溢れる躍動の

季節である。

生命力を爆発させる、エネ

ルギーに満ち溢れる躍動の

季節である。

生命力を爆発させる、エネ

ルギーに満ち溢れる躍動の

季節である。

生命力を爆発させる、エネ

ルギーに満ち溢れる躍動の

季節である。

生命力を爆発させる、エネ

ルギーに満ち溢れる躍動の

季節である。

生命力を爆発させる、エネ

ルギーに満ち溢れる躍動の

季節である。

生命力を爆発させる、エネ

シリーズ 遠野の自然
「遠野の立夏」
遠野 1000 景より



桃源郷



ヤマシャクヤク

新シリーズ【東北を再発見する旅】…①9 「アラハバキ神社」その③

岩手県花巻市の丹内山神社、アラハバキ信仰を直観できる神社



胎内石の説明板



アラハバキの磐座（アップ）



アラハバキの磐座（全景）



丹内山神社本殿

いまから五年前の年明け早々の一月下旬、急に思い立ち、岩手県の巨石巡りを敢行した。

東北の古代文化をより深く知るためには、いまも東北に残っている「巨石信仰」を調べなければならぬとの啓示が突然舞い降りてきたように感じたためだった。

遺跡巡りの数をこなすのもいいが、それだけでは片手落ちであり、古代東北のコア部分を形成する精神文化に切り込んで行かなければ、古代東北は理解できないと以前から思っていたことも確かだが、そのときは唐突に決めたのだった。

複数の巨石信仰拠点を巡る旅だったが、いまも強烈な思い出として残っているのが、花巻市東和町の丹内山神社である。

ナビゲーションに従っての行程ではあったが、初めての場所巡りのために道に迷いながらの行程だったので、丹内山神社に到着したのは夕日が落ちた直後の夕方、写真撮るにはギリギリの時間だった。

岩手県南部から北上するの高速道を走ったが、そのときすでに十五時近くになっていた、もう今日は間に合わないのではないかと途中で何度もあきらめかけ、次回にしようかと迷ったが、とにかく行ってみようと思つての訪問だった。

到着してからは大急ぎで境内を回り、目指す「巨石」を探した。

雪が積もった小高い丘をたどり「巨石」に近づいていった。「巨石」は「胎内石」と名づけられ、近くには「胎内石」の説明板があった。

それを読んで、大いに喜び、また感激した。迷いを断ち切つてやって来てほんとうに良かったと思つた。

そこには次のように記載されていた。

「胎内石」とは【アラハバキ大神の巨石】であり、千三百年前から信仰されている

とあつた。

これぞ、筆者が長い間探していたものだ。天にも昇る心地だった。

どつしりと鎮座し、ここが古代東北文化の中心であると静かに語りかけてきているように感じた。

千三百年からの信仰とは、すなわち、人間たちが、そのことに千三百年前になつてやっと気づいたということとを記念するために神社にしたのだと感じた。

帰りに、神社の案内図を見ると、とても大きな神社であることが分かった。

しかし、ガイド本にも載っておらず、訪れる人も少ないようだ。

その日もだれもおらず、幸運にも筆者が独り占め状態だった。そのおかげで、【アラハバキ大神の巨石】にゆつくりと、じつくりと対面できた。

夕暮れ時のうす暗いなかでの対面は、なおさらに神々しく神聖な印象だった。そして、鎮座するアラハバキ神の巨岩から強いパワーを受け取ることもできた。

この丹内山神社は謎の神アラハバキを祀る神社と言われ、かつて坂上田村麻呂や物部氏、奥州藤原氏などの信仰も篤く、高橋克彦氏の歴史小説「火怨」にも登場する神社ということで取り上げられているようだが、じかに接してみると、そうした宣伝文句とはまったく異なつた印象を持った。

すなわち、アラハバキ大神とは大自然の神であり、この巨石は、大自然のパワーを象徴した巨石であり、「大自然の印」であるとの印象だった。

丹内山神社の草創は今から千三百年より昔で、この地を開拓した神である多邇知比古神（たにちひこのかみ）を祀つたと伝えられている。

また、前述のように、アラハバキ神は古事記や日本書紀に登場することのない謎の神とも言われている。それは当然のことだ。大和朝廷に侵略された古代東北であつたから、侵略後、かつてはこのアラハバキ神を祀っていた神社のほとんどが、ご祭神を変えられてしまったのだ。

その後は、いわく、蝦夷の神、物部の神、製鉄の神の神などとする説もそうだが、本当のところはまったく分からなくなったのだ。

そして、いまでは、説明板にもあるように、「安産」、「受験」、「就職」、「家内安全」、「交通安全」、「商売繁盛」、「大願成就」のご利益がある神社となつている。

ただ、丹内山神社に限らず、アラハバキ神が祀られているところには必ず磐座（いわくら）があると言われている。丹内山神社もアラハバキ神を祀るために草創されたのであろう。

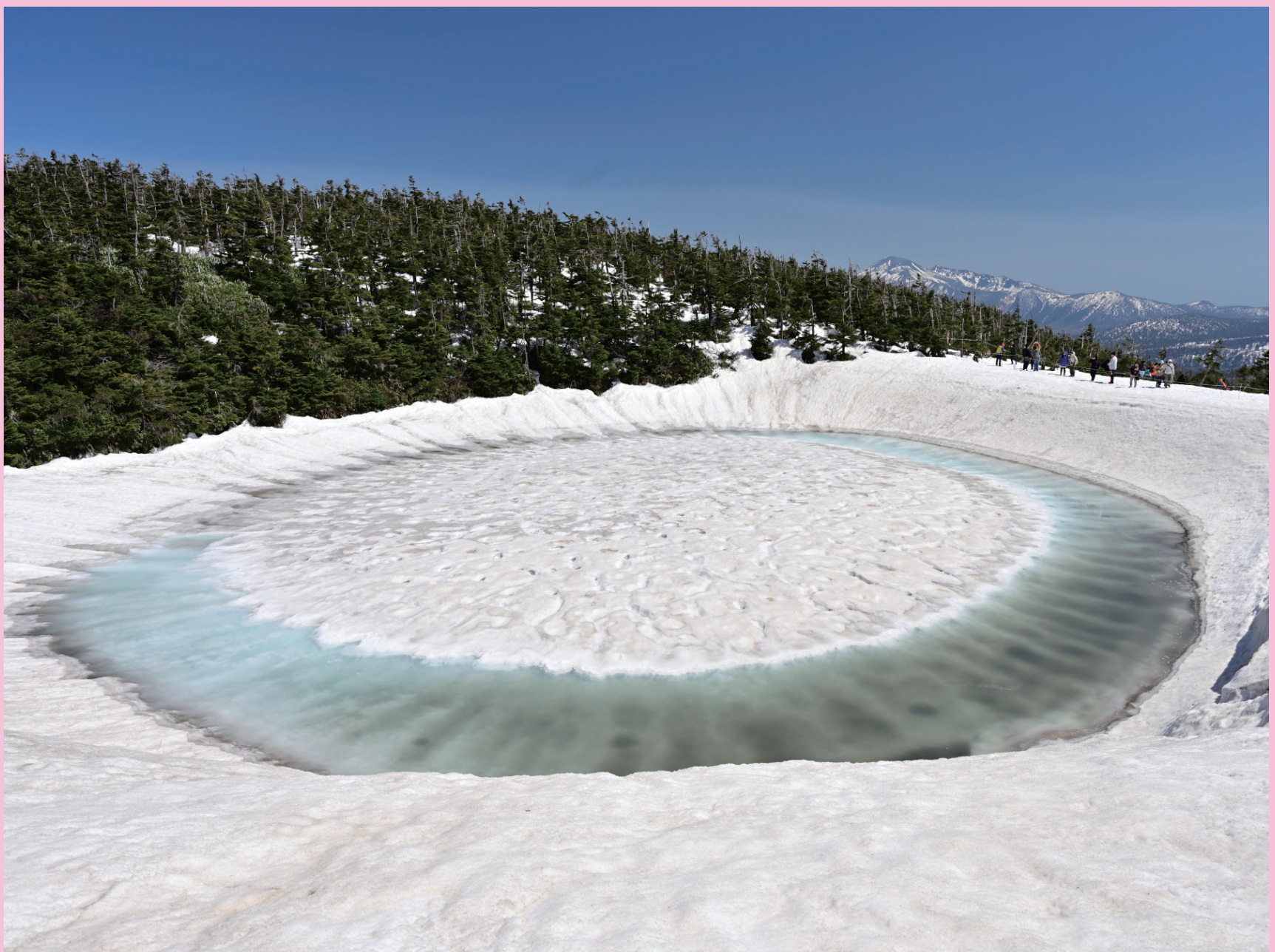
かつては、藤原清衡の篤い信仰も受け、また江戸時代には南部藩主の祈願所として繁栄してもいるようだ。真偽のほどは不明だが、坂上田村麻呂が延暦年間（七百八十二～八百五年）の東夷征伐の際に参籠した、との言い伝えもある。

かつては信仰を集めたであらう丹内山神社だが、観光地化した神社では感じられない、強いエネルギーが秘められている。

ぜひこの丹内山神社を訪れてみて、【アラハバキ大神の巨石】と対面して欲しいものである。



丹内山神社鳥居



写真でお伝えする 東北の風景

『DRAGON EYE LASTYEAR』写真撮影 尾崎匠

